4

旅の図書館

観光文化の振興に寄与するための専門図書館として、どなたでも無料でご利用になれる「旅の図書館」を運営しています。

旅の図書館の紹介

1 旅の図書館とは

旅の図書館（旧称、観光文化資料館）は、観光文化の振興を図ることを目的に、公益財団法人日本交通公社が1978年10月に開設した専門図書館です。

当館では、世界各国・日本全国の旅行ガイドブックから、観光研究の専門書や学術書まで、さまざまな利用者層に応えられる図書や資料を幅広く収集しています。

また、研究・調査を目的に利用される方には、次のサービスを提供しています。

○館内の観光研究コーナーには、当財団発行レポート、観光関連の調査報告書、国内外の統計資料や白書、紀要・論文、その他専門書等が配架され、自由に閲覧できます。
○観光関連の古書や稀覯（きこう）書、当財団本部内の資料室に所蔵されている図書・資料を利用できます（事前予約制）。※
○当館スタッフが、当館資料の所蔵、研究・調査テーマに応じた文献の調べ方、参考図書等について、ご相談を承ります。※

※上記のお問い合わせは、カウンター、メール（当館ホームページより）、または電話にて受け付けています。

2 所蔵図書

以下の図書等を所蔵しています。

	項　目	内　容
1	国内外の旅行関連図書・雑誌	ガイドブック（るるぶ情報版、ロンリープラネット等）や紀行文をはじめとする国内外の旅行関連図書を、国別・都道府県別・テーマ別に分類しています。また、旅行関連雑誌や業界誌の最新号およびバックナンバーを所蔵しています。
2	パンフレット・地図	国内外における観光地のパンフレットを国別・都道府県市町村別に分類しています。また地図（ミシュランマップ等）を国別・県別に分類しています。
3	機内誌	日本に乗り入れている航空会社（約40社）の機内誌を収集しています。特にJAL、ANAの機内誌のバックナンバーは1990年代からそろえています。
4	時刻表	国内外の時刻表（JTB、トーマスクック、OAG等）を所蔵しています。特に国内の鉄道時刻表は1872年（明治5年）からのバックナンバー約600冊をそろえています（一部欠号あり）。
5	観光研究に関する図書・雑誌・資料	観光研究に関する専門書等が閲覧できます（当財団発行レポート、観光関連の調査報告書、国内外の統計資料や白書、紀要・論文、観光関連業界誌やニュースレター等）。
6	海外電子ジャーナル	館内の専用端末にて観光論文が掲載されている以下の海外電子ジャーナルが閲覧・印刷できます（Journal of Travel Research, Cornell Hospitality Quarterly, Journal of Travel & Tourism Marketing）。※印刷は有料。データのダウンロードはできません。
7	「旅」「ツーリスト」（デジタル化資料）	日本で最も長く続いた旅行雑誌「旅」と、ジャパン・ツーリスト・ビューローの会報誌「ツーリスト」を、創刊号から所蔵しています。館内の専用端末にて閲覧・印刷が可能です。※印刷は有料。データのダウンロードはできません。
8	古書・稀覯書	日本交通公社発行の旅行案内、戦前のガイドブック、鉄道省のガイドブック、満州関係の資料、観光関連の専門書等、過去の貴重な文献コレクションを所蔵しています。※閲覧は予約制です。

3 基本情報

所在地：〒104-0031　東京都中央区京橋1–1–1　八重洲ダイビルB1
電　話：03–3516–6100
ホームページアドレス：http://www.jtb.or.jp/library/
開館日：月曜日～金曜日／午前10時～午後5時30分
休館日：土曜日、日曜日、祝日、12月29日～1月4日、棚卸し期間（ホームページからご案内します）

第8回「旅の図書館講座」
昭和レトロを楽しむ旅

開催概要
■日時：2010年1月23日（土）14:00〜15:30
■場所：旅の図書館内
■講師：昭和レトロ文化研究家
串間努氏
参加者数 36人

当財団機関誌「観光文化」183号『昭和は遠くなりにけり』にご寄稿いただいた串間努氏をお招きし、「昭和レトロを楽しむ旅」と題し、講演が行われた。串間氏は「昭和レトロ」を初めて使った昭和レトロ文化研究家として知られ、レトロ系の著書を多数執筆の他に、ご自分の「昭和レトロ商品」のコレクションを寄贈された青梅の「昭和レトロ商品博物館」名誉館長をされている。

講演は、まず昭和レトロブームの背景を多方面から分析し、ブームのなかで「昔」は良かったというノスタルジーに流されることなく、現在を評価しつつ過去の長所を生かしていくことが大切であることが話された。最近では昭和レトロをテーマに町おこしをしている地域が増えているが、地域振興の要点にも言及された。最後は、串間流・レトロな旅の楽しみ方として、①好奇心を持って旅先を眺めると発見がある、②旅にも予習と復習が大事、③写真撮影にこだわらない、④訪問地の時間の流れに合わせる、⑤観光者は生活者の領域を侵さない、⑥「あった、あった」と思い出すだけでなく「なぜ無くなったのか」を考えるのも大切、と締めくくられた。

第9回「旅の図書館講座」
日本のスピリチュアルな世界
―里山・神話の里

開催概要
■日時：2010年7月10日（土）14:00〜15:30
■場所：旅の図書館内
■講師：ナチュラリスト・フォークロア研究家
ケビン・ショート氏
参加者数 24人

講師のケビン氏は、日本は自然が豊かなだけでなく、自然と付き合う文化も素晴らしいと絶賛している。宗教が理論で説明される一方、民間信仰は生活すなわち集落や村と密着していること、スピリチュアリティーは一人ひとりが持つもの、と解説。パワースポットは、その場所の目に見えない力であり、人間の心や精神を癒やす効果があると説明された。日本のローカルパワースポットは、社寺林、水辺、境界・道の分岐点、霊山、伝説・神話の伝承地と考えておられ、大きな木には魂が宿る、水が湧き出る場所には人間は特別な力を感じる、水田・稲作の文化のある土地では特に水の湧き出るところは大切である、道の分岐点・境界や霊山には精神的な力が集まるといった、全人類に共通している傾向を指摘した。またケビン氏は将来、日本の神話が伝承されているところを調べ、パワースポットを目指す巡礼の旅（ピルグリメージ）に出たいと話された。

第10回「旅の図書館講座」
マカオと日本今昔 世界文化遺産の基盤を築いたのは
信長、秀吉！―「鉄」と「銀」を交換した戦国意外史

開催概要
■日時：2011年1月29日（土）14:00〜15:30
■場所：旅の図書館内
■講師：昭旅行ジャーナリスト
沢木泰昭氏
参加者数 34人

マカオと日本の関係は古く、1500年代後半には既にマカオ、長崎間に定期航路があった。これはマカオが石見銀山から銀を輸入していたことと関係している。当時、織田信長は西洋の情報や文物に興味があったため南蛮貿易を行い、豊臣秀吉もキリスト教に理解と興味を示した。一方、徳川家康はキリスト教布教には消極的であったが、海外とは積極的に貿易を行った。このような時代背景のもと、マカオと石見銀山の貿易は活発に行われ、南蛮屏風には貿易品の品々、例えば、日本の輸入品として絹織物、菓子、薬、学校制度など、日本からの輸出品としては銀などが描かれている。また当時、ポルトガルはマラッカを武力攻撃したが、石見銀山の輸入で富を得ていたマカオはその利益で城壁を造り、ポルトガルの攻撃を防ぐことができた。

現在、マカオは世界遺産として残っているが、これは、①石見銀山の銀で栄えた町だったこと、②アヘン戦争後に西欧のアジア拠点が香港に移ったこと（マカオは取り残されたこと）、③第二次世界大戦の中立国ポルトガルの領土だったこと、等が理由として挙げられた。